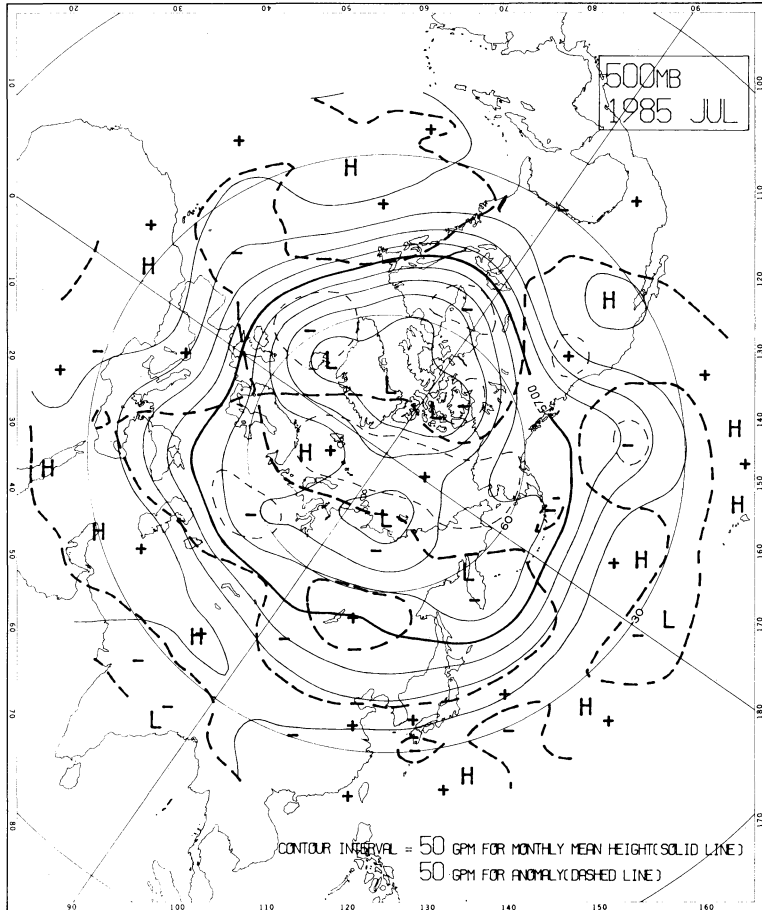


NEWS 月平均500mb 天気図. 1985年7月

(破線は平年からの偏差. 単位m)



南北流型から東西流型へ

7月は月平均図では著しい特徴はみられないが、前半と後半でそれぞれ異なる特徴があった。

6月は総じて南北流型であったが、これが7月前半まで続いた。前半の特徴は2つある。ひとつは、千島付近のトラフ、その東方の170°W付近のリッジ、さらに140°W付近のトラフ、北米大陸西部のリッジ、東部のトラフという比較的波長の短いトラフ、リッジの系列である。この型が持続したため、外電によると正偏差におおわれた米西部では連日猛暑が続き、6月末から大規模な山火事が続いた。他のひとつは、北大西洋のトラフ、西欧のリッジ、東欧のトラフという系列である。

月なかばには、これらのパターンは解消に向かい、この時期に日本では九州北部、北陸、関東甲信、東北

の各地方が梅雨明けとなった(15日、東北は19日)、と同時に北極地方の方が次第に正偏差となっていた。

後半には北極地方は正偏差におおわれたが、強い負偏差の位置は前半の40°N帯から60°N帯まで北上し、中緯度は東西流型となった。

今年の梅雨期間は各地とも降水量が多く、厳原で総雨量が1625mm(平年比275%)で観測史上最高となったのをはじめ、各地とも降水量は多かった。また、6月末より東北北部～北海道地方にも降水があり、この地方の少雨状態は解消した。

梅雨明けは北太平洋高気圧が梅雨前線を北に押し上げるという型ではなく、梅雨前線は日本の南まで南下して消滅した。そのため梅雨明け以後しばらくは大気の状態は不安定で各地で雷が発生した。

(気象庁長期予報課 宮崎保彦)